2025年（令和７年）１０月１日発行　No.０２５

郷土研通信

ツリフネソウ
アイヌ語名：オクイマキナ
奥まった沢などに生える
写真：細川音治著『阿寒・摩周の植物』

発行：てしかが郷土研究会（Teshikaga Regional Studies Association）
北海道川上郡弟子屈町中央３丁目2-10（松橋方）
文章責任：松橋　秀和

近況報告

・仁多獅子舞復活報告会

九月二二日（月）夜、弟子屈町公民館で、仁多獅子舞の狩野会長等が一五年前から復活を望んで取り組んだ経緯や練習、弟子屈神社例大祭の奉納の舞の様子を弟子屈公式チャンネルのメンバーが撮影編集したＶＴＲに編集したものを視聴させていただきました。微かに残る記憶を頼りに再現する努力は当会の志に通ずるものがあると、感じました。

当会の勉強会でこの映像を視聴と併せて、鈎別・仁多獅子舞のお話をお聴きする機会を設けたい、と考えています。

・詩の朗誦会

当町から更科源藏文学賞が無くなってから久しく文学に関する催し物がありませんでした。

九月一二日（金）、木村会員が主催する詩の朗誦会がレストラン＆カフェ摩周の森を会場にありました。

東京、北見、置戸、弟子屈から来られた詩人や音楽家によるパフォーマンスを披露されました。

会場の関係もあり少人数の催しでしたが、木村会員の飛び入りの朗誦もあり演者の個性ある表現や堪能することができました。

活動予定

・町民文化祭に参加

十月二日から開催予定の町民文化祭で、当会の活動の様子を知っていただくため、パネル二枚程度のスペースに「郷土研通信」の展示を行いたい。作業は十月月一日十時頃からを予定しています。

勉強会

演題
古郷の黎明期
講師　酒井盛興会員

「先に与えられた演題は、私が撮りためた写真帳から何か紹介する、との事でしたが、町の歴史を資料で調べると色々と面白いことがわかりはじめたので、皆さんには町の歴史の復習も兼てお話したい」と、川湯地域を中心にして解説されました。

お話は

・川湯硫黄山の標茶集治監の囚人を使用した事。その囚人の多くが明治期の政治犯であったこと。

・川湯温泉の開祖的存在の浅野清次は、没する前に「俺の墓は飯盛山にある」と語っていることから会津白虎隊の敗残兵と云われているが、白虎隊は一六歳から一七歳で編成されている。浅野は当時一九歳くらいなので朱雀隊ではなかったか。

また、戊辰戦争終結後、維新政府の追及を逃れるため渡道し、自身は戸籍を提示できないことから五月女姓の少女を養女とし、その養女の名義で数々の法律手続きのいる事業をしていた。その事業を引き継いだのが養子となった十次郎である。

仁伏に寺子屋のような学校があったが、そこで教えていたのは当時国際問題を起こした一味（俗に海賊）の残党と云われている。

等、資料を提示して紹介されました。

次回の例会

令和七年十月二二日（木）
一九：〇〇
ふるさと歴史館

勉強会

演題
（仮題）
仁多獅子舞復活の道のり

むかしむかし写真館

No.３５８

川湯硫黄山（アトサヌプリ）とシラカバの変遷

写真①は、川湯硫黄山から川湯市街地へ通ずる昭和初期頃の風景の絵はがきである。

永山在兼が屈斜路湖畔線を大正14（1925）年に、川湯～跡佐登の本線・支線を開通させたのが昭和３（1928）年であるから、写真は昭和の初めころのものであろう。

６月になると川湯硫黄山々麓にイソツツジが咲き誇る。第１回「川湯つつじ祭り」が昭和27（1952）年６月に行われたが、行われなくなったのがいつなのかは資料が手元に無いので不明である。

①硫黄山から川湯市街地を望む

硫黄山から川湯市街地を望む（現在）

硫黄山お花畑（昭和初期）

この写真を見ていつのころであろうか失念したが、川湯の観光業者がシラカバの繁茂でイソツツジやハイマツの生息区域に悪影響するのではないか、と話をしていたことを思い出した。

硫黄山から川湯市街地を望む（現在）

シラカバは、植物が生息しづらい火山灰地などの土地にいち早く生息する「先駆樹種」で、樹齢は70～80年と言われている。川湯硫黄山の硫化水素ガスの影響を葉や樹皮から受けるとその寿命はまだ短いのではなかろうか。幹の太さが15センチを超えるようなシラカバをこの付近では見た記憶はない。シラカバが繁茂して景観が変ると観光業者が心配（経済的に）する程のことはない。自然環境に余計な手を加えるのではなく、成り行きに任せるのが一番である。

他人事ながらある道内のある観光地が、火山噴火で泥流が流れたあとにいち早くシラカバが生え始めてきたので、これに「シラカバ街道」と名付けて観光名勝にして大々的に宣伝していた。が、間もなくトドマツなどの針葉樹や落葉広葉樹の幼木が進出してきていた。今はそれなりに繁茂していることだろう。一時の経済的効果はあったのであろうが、その後どうなったのか。

経済的規模は小さいが、国立公園の区域から外れ、景観を壊さない範囲で離農した農地を活用して、シラカバの林やイタヤカエデの林を造成し、イタヤカエデからは、雪どけの時期に樹液を集めて加工して利用することも考えられる。

樹木が充分に成長するまでシラカバなどの花粉症を我慢ができるかだが。

松橋秀和　筆